
悠久のフォルトゥーナ

kazaisyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悠久のフォルトゥーナ

【EZコード】

N3702Y

【作者名】

k a z a i s y u

【あらすじ】

気がつけば、俺は花畠の只中にいた。

目を覚ましたとき、カナメがいたのはVRMMO オーリオウル・オンラインの中だった。自らがプレイヤーだったはずの……見慣れているはずの世界。しかし、どこか違う? これは……本当にゲームなのか?

ゲームオーバー=死。脱出不可能な、完成された 世界 の中で、少年は何を残すのか……。

ズウン、という音ともに、巨人の頭が地面に落とした。天をも衝くようだつた威容だつた、その鋼鉄の巨人は、今や地面に片膝をつき……そして、登頂から順番に、頭から肩へ、剥がれ落ちるよう崩れていく。

そして数秒後。その全てが瓦解するように、大地へと崩れ落ち、天高く砂埃が舞い上がるのと、まったく同時。

巨人の足元に居た俺は、砂埃を被りながら……しかし、高らかに武器を掲げて　気がつけば、俺は叫んでいた。

卷之三

一年間の永きにも及んで誰も攻略しえなかつた、難攻不落のSランクユーダクモンスター……「ギガース」は、ついに、俺達の手で討伐された。

空に浮かぶ、白く、そして薄く濁る円環が、俺達の勝利を見下ろして居る。

（記）一〇〇。敵軍の砲兵、機関兵、歩兵等が、同様に、火薬庫を攻撃する。

これは、俺はど^うで、何よりも輝かしい記憶
決して失いたくないと願う、あの冬の日の記憶……。

「やつたなあ、力ナメ！！」

がつんつ、と肩を組まれると同時にジョッキをぶつけられ、俺は

わざかによるめいた。

見ればそれは、この店 任せたおけばいいものを、自分で創業したこの店を、わざわざ自分で切り盛りする偏屈者だ。

そこまで強くぶつけられたわけでもないのによろめいて、「こりや酔つてるな……」と少し自覚。とはいえ、ぶつけられた方の顔も真っ赤であり、似たようなレベルであるから問題ない。

ぶつけられたジョッキには、当然ながらみなみとエールが注がれており、それは相手の方も同じだ。

無論、この世界……即ち、一没入型ネットゲーム（VRMMORPG）において、酒を飲んだところで本当に酔っぱらうわけではなく、その酩酊感は、あくまでシステムの作り上げた幻覚でしかない。……のだが、まあそんあことは些細な問題である。

気がつけば周囲も、割と惨状である。酒に弱いらしい面々は早々に酔い潰れて眠ってしまっているし、人によってはなぜか性格すら変わり、説教すら始めている者もいる。

（リンの奴……ストレス溜まつてんのか？ ライも可哀想に……）
説教する側を心配し、される側を憐れみはするが、まあ助けるつもりは毛頭ない。せっかくのこつこつ席だ、思い思に呑めばそれでいい。

今日は、このVRMMO…… オーリオウル・オンラインにて、初めてのランクのユニークモンスターが討伐された日である。ユニークモンスターというのは、いわゆるボスのようなものであり、時にダンジョンの奥深く、時に偏狭なフィールドに出現する強敵だ。

モンスター ランクは雑魚であれ何であれE～Sに分けられ、Sというのは最高ランク、そのユニークともなれば……要するに、このゲーム最強の一角を占めるモンスターと言つても、相違ないだろう。

ネットゲームが往々にしてそうであるように、このゲームにはエンドティングと呼べるものは存在しない。あるのはただ、茫漠とした広大な世界である。ストーリーは、一人一人、プレイヤー自身が創り上げていく。それは要するに、人生と同じものだ。

しかしこの オーリオウル・オンライン の茫漠たるや、まさに筆舌に尽くしがたい。

そも、最強と呼ばれるSランクのユニークモンスターが討伐されるのに、およそ一年という長い年月を有したのだ。

まあどれだけ強かるうが、何百人単位でプレイヤーが押しかければ倒せるのだろうが……そこは生憎、ユニークモンスターは、戦闘人数が十人を越えるとどこぞへ消えてしまうのだ。

まあともあれ、今日この店は、Sランクユニークモンスターを倒した、十人から成るパーティ……つまりギルド — 銀楯の聖槍 (S.E.L.) — による貸切だった。

とはいえる、俺はギルドの一員ではないのだが……まあ、それこそ些細な問題という奴だろう。

「しかしよお……ぐつ……。感慨深いぜ……」

「あ？」

肩を組んだままの店主が、ぐつと袖で目元をぬぐつ。

「だつてよお、俺はお前らがヒラのピラピラギルドの時から面倒見てやつてるからよ……」

「どこの設定だそりや……」

半眼で告げ、溜め息を吐く。

この店主とは、非常に長い付き合いだ。正確には、俺がこの店に通い出して、気がつけばギルドの面々も行きつけになつた、というところだろうか。

実際この店は、この街、交易都市カリスで指折りの店だと思う。大通りから離れているという立地条件の悪さを除けば、雰囲気は

いいし、飯もうまい。とはいえたそれを褒めると、この男は調子に乗るので黙つておぐが。

しかし、交易都市カリスをホームとするギルド、一銀楯の聖槍（S·E·L）がここに通い出したのは、むしろ彼らがトップギルドに数えられるようになつてからだ。

「まったく、無茶苦茶言つて……」

「……でも、感慨深いのは同感」

俺の溜め息混じりの言葉に、かぶさるよつて聞こえた声は、ひどく聞きなじみのするものだつた。

「シノブ姉？」

振り返れば、そこにはアイスグリーンの髪の少女が、じつとこちらを見ていた。

その表情は無表情である。しかし、長年を共に過ごした経験から、それだけではないこともよく知つていた。もつとも現実世界ならばともかく、それがアバターである以上、簡単に読みとることなど出来はしないが……。

「……私は、カナメのおかげだと思つてる」

はつきりと告げられた言葉に……しかし、俺は小さく笑つた。

「そんなことないよ、シノブ姉。だつて、俺をここに……この オーリオウル に誘つてくれたのは、シノブ姉の方じゃないか」

シノブ。そのアバター名は、しかし彼女の本名もある。

蓮宮忍。彼女は自分にとつて、隣に住む古くからの幼馴染であり、そして自分……何の取り柄もない平凡な男、千条要を、この世界に連れてきた張本人もであるのだ。

それゆえに、シノブ姉。

その呼び名は、現実でもこちらでも変わらない。そして俺のアバター名『カナメ』も、本名と同じだから、この二人の間だけは呼び方がそのままだ。

……まあ、俺のアバター名が本名と一緒にるのは、シノブ姉に半ば無理矢理そうされたんだけど……。なんでも「要の名前、好きだから」とかそんな理由で……。

少し微笑んで、俺は言葉を続けた。

「それにさ。俺なんて、所詮は前でガンガン当たって砕けるしかないだけのアタッカーで……それこそ、シノブ姉のヘイト管理がなかつたら、すぐに死んじまうくらいひ弱でさ」

「……そんなことない。カナメのアタッカーとしての攻撃力は、私は凄いと思う」

「それは、私も同感だな」

ふと、唐突に割りこんできたのは、例の、説教を繰り返していた黒髪の女性だった。

「隣で戦っていても思うが、カナメのあの精神力は凄いよ。どんなに強烈な攻撃でも、ギリギリで避けて反撃するんだ。普通なら、もつと怖がって距離を取るはずなのにな」

「いや、正直、リンが背中を守ってくれるおかげだと思つてるんだけど、俺は」

そう言つて苦笑する。リン、と呼ばれた、黒髪をポニーテールにまとめた少女は、「そうか」と言つて顔をやや赤く染めた。

「それに、一銀楯の聖槍（S·E·L）の一員じゃないはずの俺が、このパーティに参加させてもらえたのも、懐の広いマスターさんのおかげだしな」

彼女、リンは、ギルド——銀楯の聖槍（S·E·L）のギルドマスターを務めている。……というよりもむしろ、リンのカリスマ性にあやかつて結成された、とも言つていい。

リンというプレイヤーは、容姿、実力、性格ともに、オーリオウル・オンライン 数十万人のトップに位置している。

「ランクユークモンスターの討伐パーティにとつて、彼女ほどおあつらえ向きな人間もないだろ？」事実、作戦や準備から何まで、彼女はパーティリーダーとして、その手腕を遺憾なく發揮していた。

対する俺は、『ミュニケーション』自体は苦手ではないのだが、ギルドが苦手なこともあり、ずっとソロまあシノブ姉がいるからペアかプレイを貫いていた。いわゆる「匹オオカミ気取りか。そんな俺に、「一緒にパーティを組まないか」と初めて声をかけてくれたのが彼女だつた。

シノブ姉の意向もあって、再びのギルドへの加入要請を断り続けている俺を、しかしそれでも気分を害することなく、ずっと誘い続けてくれた。

「その点、俺は感謝してるんだ」

彼女のような存在がいなければ、当然、今日のような感動的な場面に遭遇することなどありえなかつただろうから。

リンは、カナメの言葉に、「そうか」と少し嬉しそうに微笑んだ。その頬は、やや朱に染まつたままだ。

「あれれ～、リーダー、もしかして照れちやつてるう～？」

横から、聞き覚えのある声で離したててきたのは、ピンク色の髪をした少女だ。にやにやー、という効果音が聞こえてきそうな、そんな笑みを浮かべている。

「ぎぎぎぎ、」という効果音を立てて、リンがひきつったような笑顔で振り向いた。

「ユーリ～？ 何か言つたあ～？」

「あ、ごめんなさいリン、ちょっと、待つて、私何も言つてな」

「問答無用 つー！」

「すゞがががつどんがらがつしゃーん！」

と、まあ効果音にすればこんな感じだな。鬼と悪魔が追いかけっこを始め、周囲からは「やれやれー」とはやし立てる声が聞こえてくる。

それに小さくため息を吐いて、再び視線を戻す……と、今度は姉が膨れていた。

「シノブ姉え？」

「……私は、弟が人気者で心配」

「はい？」とわけが分からずに問い返す。しかし、それに答えたのは、横合いからの笑い声だった。

「ははは……確かに。カナメさんはモテモテですね。同性としては羨ましい限りです」

爽やかな声に振り向けば、そこには、金髪碧眼の細面の少年が、いつの間にやら腰かけていた。

「ライ。お前、さっきまであっちにいなかつたっけ？」

というかむしろ、あっちで説教されていた気がする。

「ええ、何やら不穏な予感がしたので、こっちに避難してきたんですね」

カナメの疑問にあつさりと断言され、「あ、そう」と肩を竦めつ返す。

この細面の少年、ライ、ことライリッシュは、銀楯の聖槍（S·E·L）のサブリーダーである。そして、自分にとつては数少ない、親友と呼べる少年だ。

ちなみに、コイツが敬語なのはデフォルトだ。目上とか目下とか、そういう類のものではない。誰に対しても丁寧な物腰で接する、まあそういうスタンスなわけだ。

「しかしあ前も大変だよな」

「何がですか？」

エールを口に運びつつ、ライが首を傾げる。それに、くい、と親指で背後 魔力障壁を挟んで睨みあいを続ける鬼と悪魔 を指差した。

「あの連中のセーブ役とか。俺には無理すぎる」

「はは、そりや僕にも無理です」

要約すれば「早く止めてこいよあれ」という意味だったのだが、即答で返されて、再び「あ、そつ」と返すほかなく ぐびり、ともう一度エールを喉に注ぎこんだ。

「そういうえば、さつきの話なんですけど」

「さつき？」

「カナメさんは凄い、っていう話です」

にこり、とライはその細面で微笑むと。

「正直、僕も……あの ギガース を倒せたのは、僕はカナメさんのおかげだと思つてます」

至つて真面目に、そして優しい声で。はつきりとそう断言されて……しかし、これに「あ、そう」などと返すわけにもいかない。

ぽりぽりと頬を搔いて、エールを煽りながら言葉を返す。

「何言つてんだ。お前のヒールがなきや、俺は早々に死んでたよ」
ライは 一銀楯の聖槍（S·E·L） のサブリーダーであると同時に、優秀なヒーラーでもある。

雑魚戦ならばともかく、正直、ああいう大規模なユニーフ戦では、あまりこいつ以外にヒール役を任せたくない。

それほどまでに優秀かつ冷静、そして常に大局を見れる大物なのだ。

少なくとも俺はそう思つてゐるし、同じ意見の人間はそれこそ「マン」といはるはずである……。

「カナメさんは、自分を過小評価しすぎなんですよ

優しくも、しかし少しだけ嗜めるような色を混ぜて、ライは微笑んだ。

「あれだけ敵に張り付いて、あれだけの効率で攻撃を叩きこめるダメージディーラーを、僕は他に知りません。リーダーも僕も、ギルドのみんなつてそう思つてますよ」

確かにそりや、アタッカーとしての自信はそれなりにあるけれども。

だが、それは過大評価つて奴じやないのか、などと思ひながら…しかし、口から衝いて出たのは、まったく違う種類の言葉だった。

「この十人のパーティ……誰が欠けたつて、勝てなかつたさ」「ああ臭い……と、言ってから少しの後悔。

だけれども、悪い気はしなかつた。きっと、それは掛け値なしの、酒が入つていたからの本音だつたから。

ライは、少し驚いたような顔をして……そして、ふつと微笑んだ。「…………そうですね」

カンツ、とお互いのジョッキを合わせる。

今日の日を祝つて。

そして、これからに幸あれと。

かくして、オーリオウル・オンライン の、フォルトゥーナ大陸の片隅で。

賑やかで、しかし幸せな、宴会の夜は更けていった。

昨日の記憶が、正直言つてあんまりない。

呑んで騒いで歌つて、最後には全員が酔い潰れたことまでは覚えているが、そこから先はまったく記憶にない。

ましてや田が醒めれば、なぜか

シルヴァリー・エスク・ロンギヌス

銀楯の聖槍

のギルド

ホームのリビングで寝転がっていたとか……もはや意味不明すぎる。寝るならなぜ、自分の泊まっている宿屋じゃないのか。みんなはどうしたんだね? つーか根本的に俺どうすりやいいんだ、などという考えがぐるぐると渦を巻き、ソファーに座つてつるんと呟つていた。

貿易都市カリスの片隅に存在するこのギルドホームは、非常に広大な面積を有している。

曰くなんでも、ギルドホームとこりやつは、ギルドランクに応じて増築されるらしい。であるなら、一体S・E・Lはどれほどのレベルなんだろう? ……。そう思わせるほどのデカさ、そして豪華さだ。白亜の富殿を思い起こさせるような、そんな美しさ。しかしその一方で、いやらしさを感じさせないような、どこかシックな雰囲気。（落ち付くな……）

そう思いながら、ソファーに体重をかけると、ぎしづと軋んだ音を立てた。

「つーか今何時だ……」

この オーリオウル・オンライン は、たとえ内部で熟睡しても自動的にログアウトはしない。

しかし、自動的なログアウト、といつものが存在しないわけではない。

ひとつは、外界……すなわち現実世界の肉体が、何らかの刺激を受けた時だ。肩を叩かれたり、頬をつねられたり、あるいは音を聞いただけでログアウトしてしまつ。まあこのあたりの設定は自分で弄られるわけだが。

もうひとつは、二十四時間が経過することだ。

機械の構造上、二十四時間以上の連續使用は不可能になつており、たとえどのようなプログラムであつても、二十四時間以上プレイヤーを拘束することは不可能である。

これはハードウェアの問題であるので、VR機器を改造しない限り、二十四時間以上のログインは不可能であるのだ。
まあもつとも、たとえ一分でもログアウトすれば、再度ログインできるのだが。

右手の指を揃えて、内側に引く。ユーザーアイインターフェースを出現させるコマンドだ。すると、わずかな音を立てて、水色のインターフェースが視界右側に出現した。

ステータスやアイテム、クラスやスキルといった項目が並ぶ、最下部。時間は

（げ、朝の十一時……）

寝すぎだろ、俺。

基本的にゲーム内時間は日本時間と同期しているので、こちら側も昼ということになる。

もしかして俺は、朝から昼までずっと、このリビングを占領し続けていたわけなのか……。

申し訳なさと、同時に「じゃあギルドに入ろう」とか迫られそうな予感がして、若干ブルーになつていていたのだが……。

そのとき、ギィ、という扉の開く音が聞こえて、はつと顔をあげた。その扉の向こうから姿を現したのは……鶯色の髪の少女。

「……なんだ、シノブ姉えか」

「……なんだとはなんだ」

顔を出した当人はふくり、と少しだけ頬を膨らませてから、ぱたぱたとこちらに駆け寄つて来る。

「……どう？ ちゃんと起きてる？ 頭痛くない？」

「ああ、大丈夫」

というよりも痛いわけがない。ゲームの作りだした仮想の酒に、一日酔いなどというものが存在するはずもないのだ。

「そういえば、他の連中は？」

「リンとコーリさんは落ちてシャワー浴びるつて。ライ君は買い出し。ミミは下で武具の補修。他の人たちももう落ちた」

「……なる」

他の人たち、というのは、前者と自分たち五人以外の、昨日のパーティメンバーのことだろう。S・E・L・のメンバーであり、自分にとつても得難い友人だ。が、実のところシノブ姉はその名前すらも覚えていないのだろう。

この人に、団体行動は無理なのだ。天性の引きこもりにしてひとつ。人の名前を覚えるのは大の苦手。コミュニケーショングループよりもさらに皆無だ。むしろ、リズやライたちの名前を覚えているだけでも奇蹟に違いない。

まあもつとも、それで不快というわけではない。この人は、自分が認めた人には誰よりも優しく接するのかを知つているから。

シノブ姉の言葉に頷いて、「よつ」とソファーから立ち上がる。

「どうする？」

「俺ももう24だし、ミミさんに武器預けて、一風呂浴びてくる」

そう、とシノブ姉が頷き、そして同時にぴたりと傍によつてくる。そして必殺の上目遣い。毎回思うのだが、この人分かつてやつているんじゃないのか。

そんなことをつらつらと考えるカナメに届いてきたのは、一言。

「……」「はん」

「作りに来いと?」

「イエス」

「ですよねー、と頷いて、分かったとばかりに肩をすくめる。「待つてる」と言つシノブ姉を置き去りに、リビングから出て、そして地下への階段に。

地下への螺旋階段を降り始めると、カン、カン、という音が木靈するように耳へと届いてきた。

地下は、S・E・Lに所属する、専属の鍛冶師のために用意された空間なのだ。とはいってもそう広いわけではないが、鍛冶のための設備は一通り整っている。

螺旋階段を降り、石造りの門を潜る。

むわっとした熱気に、思わず息を吐いて体温を調節。もつとも、その奥で金槌を振り下ろし続ける人物に、声をかけることはしない。作業中に声をかけるのは、明確なマナー違反だからだ。

一言で言えば、小柄な人物であった。

正直言つて、片手に持つハンマーが非常に不釣り合いそのものだ。くりくりした瞳、流れる金髪、華奢な腕、どこからどう見てもただの少女。それが、この熱氣の中で汗を垂らしながら、一心不乱に金槌を叩き下ろし続けているのだ。

鍛冶、というのは、生産系クラス 鍛冶師 のみに許される特別スキルである。

といっても、実のところ、多くの鍛冶師は他のクラスの片手間程度のものでしかない。

ある程度、自由にクラスの付け替えが可能なこの オーリオウル・オンライン では、戦士をやりながら一時だけ鍛冶師、といつもつなプレイスタイルが可能なのだ。

しかし、このような大規模な鍛冶設備を使えるだけの高レベルの鍛冶師は、サーバー内に百人もいるかどうか、というレベルだ。数十万のプレイヤー人口に比して極端に少ないその理由は、はつきり言つてしまえば、育てるのが大変すぎるからだ。

そもそも、鍛冶師のスキルは戦闘にまつたく必要ない。それでいて、大規模な鍛冶が行えるまで育てるには、非常に膨大な経験値が必要となる。

しかし一方で、鍛冶師というのは、モンスター「ドロップしない」特殊な武器をその手で製造し、時に折れた剣をすら修復出来る貴重な人材である。もっとも材料費が馬鹿にならないので、稼ぎになるわけではないのだが。

そういう意味で、S・E・Lのよつな専属の鍛冶師を持つギルドは、まさしくほんの一握りなのだ。

アイテムインベントリを操作して、昨日のうちに外しておいた装備関係を足元に出現させる。

修理してほしい武器はその辺においておけ、というわけだ。実際、他のキャラクターのものであろう装備が、その辺に転がっている。不用心と思われるかもしねだが、実際、ギルドの内部で盗難が起ころなどありえない。それほどの信頼関係を、このギルドは築いていた。

さて、それじゃあいくか と踵を返しかけたそのとき。

カン、という一打ちとと共に、部屋の中に眩い閃光が走った。おおつ、と振り向ぐ。それはすなわち、作業が完了した証明だ。

鍛冶、といつても、これといった特別な作業は存在しない。

基本的に、素材を叩いて武器を作り、研ぎ石に掛けて剣を研ぎ、そして折れた剣を叩いて修復する。そしてその作業が終わつたとき、武器が光り輝くのである。

しばらくして光が収まると、少女の手には、一本の美しい剣が出

来上がっていた。

「御苦労さま、////わふ」

ふう、と額の汗をぬぐつ少女に一声かけると、はつあつ、と飛び上がるよつに反応した。剣を落としかけるといふを危うくキャッチし、もう一度ふう、と額を拭う。

////、と呼ばれた少女は剣を鍛冶台において立ち上がると、いからくと振り向いた。

「もうつ、いつからいたんですか、カナメさん？」

「ん？ いや、ちょっと前からだけど……」

「声ぐらい掛けてくださいよう、びっくりしちゃいました」

ふくり、と頬を膨らませてそっぽを向く。こいつ言つては怒られそうだが、なんというか、実にカワイイ。小動物的な意味で。

////さん、と呼ばれたこの女性は、ギルド S · E · L の専属鍛冶師だ。

そのかわいらしげに見た目とは裏腹に腕は一流で、専属鍛冶師でありながら、割と依頼が殺到したりもする。

時折、リンからゴーサインが出て、外からの依頼もこなすわけだが……実際のところ、その理由の大半は、むしろ彼女自身に由来している気がする。

背は低く、しかし美しい金の髪と白い肌が、まるで妖精のような雰囲気を彼女に与えていた。それでいてこの性格なのだから、ファンがつかないことはありえない。

ちなみに、自分とはこここの専属鍛冶師になる前からの付き合いで、その延長線上で、未だに武器を鍛えてもらつたりもする。

「『めん』『めん』。作業に集中してたみたいだから。……といふでそれは？」

「あ、はい」

苦笑しつつも問つと、ミミは手元にあつた剣を掲げた。
黄眉色の刃と、美しい装飾。太陽の日差しを浴びれば、さぞ美しいだろうと思える意匠。

「……アーベントルーラーか」

「アーベントルーラー」
暁の守護者、といふ名前を冠した片手剣だ。鍛冶師、つまりミミによつて作られた品で、それゆえに世界に一本しか存在しない。

「はい。リンさんに頼まれてたので」

「そういや、折れたんだよな、確か」

例のギガースとの戦いの後半、脛へ斬撃を加えると共に折れてしまつたのだ。あの時はまったく表情を変えずに、剣を予備に交換して戦闘を継続していたが、あの剣を愛用していたリンはさぞ悔しかつたことだらう。

ええ、ミミが頷くのを見ながら、まじまじと剣を見つめる。

「でも凄いな。完璧に修復してあるじゃないか」

「はい、なんとか。鉱石も余っていたので」

修復、というのはかなり難しい技術だ。

一度作成した剣を修復するには、その剣にあつた温度の水と素材、そして何より高いスキルレベルが必要となる。特にアーベントルーラーのような強力な剣ならばなおさらだ。

そしてそれを難なく実行してしまえる、このミミといふ鍛冶師の腕は正に本物だ。

「ところで、カナメさんはどうしてここに……あ、刃研ぎですか？」

「そゆこと」

問われ、カナメは自分の置いた装備を指で指し示した。

「なるほど……これからどうするんです？」

「生憎、もう時間なんでね。俺はいつたん落ちるよ。悪いな」

なるほどー、と頷くミミに、申し訳なく頭を下げた。

かくいう彼女も、昨日の飲み会にはきつちり参加していたのだ。

まあ速攻で酔い潰れて眠つていたわけだが、疲れていたのもさうと同じはずだ。

だとうのに、恐らくシャワーを浴びる間もなくこうして作業に没頭している。

「私のことは気にしないでください」

こちらの心中を察したのか、ふつと優しく彼女は微笑んだ。

「正直、昨日みたいな凄いイベント、近くで見せてもらつただけで十分です」

彼女はパーティには参加してはいなかつたが、モンスターの反応圏外から応援していたらしい。もつとも、割と距離があつたのでその声は届かなかつたが。

ただ、そういうたギャラリーはあの日四十人以上はいたと思われ、結構な緊張を強いられたものだ。まあ、誰かがうつかり圏内に入ることはなかつたので、特別問題があるわけでもないが。

「あ、言ひ忘れてました。S級ユニーク討伐、おめでとうございます」

「ああ、ありがとう。それも、ミミさんの作つてくれた武器のお陰だ」

「ふふ、そつ言つてくれるだけで十分ですよ」

言葉通りの嬉しそうな顔で微笑むと、「それじゃあ、作業に戻りますね」と積まれた武器の山へ向かつていった。

それじゃ、と手を挙げようとして……ふと思つて至る。

「あ、そうそう。ギガースの落とした素材、ミミさんに使つてもうう予定なんで」

これは昨日、ギガースへ挑む直前に全員で決めたことである。いつそのこと、何か強力な装備を作つてもらおつゝと。

「ほつ、ほんとですかつ！？」

カナメの言葉に反応して、すさまじい勢いで振り向いたミミが、

星のような効果音を伴うかの「」と田を輝かせた。

「ああー、憧れのU級ユニーク……一体どんな武器が出来るんでしょう?」

刀ですかね、片手ですかね、と夢現状態で両手を組んで空を見上げる。

……ああそういえば、彼女の悪癖を忘れていた、と若干の後悔。はつきり言つてしまえば……いわゆる鍛冶バカ、なのだ。彼女に鍛冶を語らせると、一田あつたつて足りやしない。

……まあ、別に困るわけでもないんだけどな。

そう思いつつ、「それじゃ」と巻きこまれる前にそそくさと退散した。

「やつぱりああいう時は、僕が前に出るべきなんですかね?」

……ログアウト後、飛び込むようにして風呂に入り、玄関のチャイムを鳴らして勝手に忍姉の家に上がりこんだ。

うーだーと布団にくるまつたままのスーパー二ートを風呂に放り込み、適當かつ手軽に飯を作り、一人で食事。正直、なかなか親が帰つてこないのと、お隣の二ートがいつも乞食だつたせいもあり、飯の腕前だけは人に誇れるものになつていていたりする。

そしてその後、再びのオーリオウル・オンラインへ。

ログインすると、既に大広間に全員が集まっていた。

修理を終えた武器を返却され、それらをまとめてインベントリに叩きこむと、大広間の一角にて、先日の ギガース 討伐についての反省会と相成った。

「うーん、どうだろ。正直、ヒーラーが一人じゃちょっと膚薄いし

……

ライの言葉に唸りながら答えると、俺の正面に腰を下ろした、紅色の髪をした少女……コーリが片手を挙げた。

「私も同感。正直、サンちゃん一人じゃちょっと心許ないしねえ」サンちゃん、というのは、この場にいないパーティメンバーの人、@サンクレア@である。さばさばとした銀髪のお姉さんで、ライと同じくヒール要員の一人である。

しかし一方、ライは彼女とは違い、前線のタンク役としても活躍できるだけの強靭さと冷静さを併せ持っていた。ヒールも出来るため、彼はそんじょそこらの壁役よりもよっぽど硬い。

とはいって、ライのヒール技術はギルド随一だ。有名ギルドのサブリーダーだけあって、ステータスだけでなくプレイヤースキルの超一流。正直、彼の支援がなければ、今回の闘いは切り抜けられなかつただろう。

「私も同感だ、ライ。正直、ジーグと私で、S級ユニーカもそれなりに壁^{タンクビルト}できるようだしな」

ジーグ、というのも、ここにいない四人のうちの一人だ。クラスはグランドガード、典型的な壁構成だ。

一方ユイは、タンクとアタッカーの中間、といったところか。避けつつも受け、受けつつも攻撃する。ライが後方の司令塔だとするなら、彼女は前線の司令塔だ。事実、彼女の指揮がなければ、前線はあっさりと瓦解していただに違いない。

「なるほど、確かに……。カナメさんのお陰で、アタッカー層も厚くなりましたからね」

「そうだな。この恩恵は大きいよ」

ライとリンに口々に賞賛され、むぐ、と言葉を詰まらせつつ、話題を別方向に修正するべく口を開いた。

「課題は魔法役じゃないかな。いくらコーリさんがいるつていつて

も、魔法役が一人じゃキツイでしょう。S級の物理耐性を考えたら、出来れば三人は欲しい」

今回の構成は、すばり前線四人、回復一人、弓一人、魔法一人だ。バランスがとれてはいるが、実のところ弓と魔法の一人ずつは、周囲にわいてくる雑魚の掃除がメインであつた。

ここはいつそ弓を一人削つて、魔法を増やしてみては……いやいやむしろ、属性持ちの一ガンナー（SG）とか……などと考えていると。

「あらあ。それはつまり、私じゃ不満つてことお？」

にやりと怪しげな笑みを浮かべ、コーリがテーブルに身を乗り出して、こちらへとにじり寄つて来た。

「はい？」

いや、違う、そういう意味では などと言いかけたところに。スパン、と小気味の良い音が炸裂して、コーリがテーブルの上で蹲つた。

「馬鹿なことをしないで、眞面目にやれ」

見ればその隣に座つていたリンが、いつの間に装着エクイップしたのか片手にハリセンを持ち、青筋を浮かべていた。

対して叩かれた本人、コーリは、ちえーと唇を突き出して、明日の方を向いた。

「もー、リンつたらまたそうやつて妬いてー。女の嫉妬はミニクイよー？」

「な、なつ……！」

冷やかすような言葉に、がたんつ、とその場で立ち上がり、真つ赤になつてわなわなと震えている。

「あら？ ごめんなさい、冗談だつたんだけど……図星だつたりして？」

てへ、と笑みを浮かべるコーリに、わなわなと震えるリンはこめ

かみに青筋を浮かべ……そして、田代もとおりぬ早業で、インベントリを開く仕草をした。

「あ……あ、まあ～～……」

リンの中から、ハリセンが無数の青い粒になつて消え去ると、今度はその逆送りを見るよう、両手に剣が生成された。

「げ……マズ」

対する少女も早業だ。同じくインベントリを操作して杖を装着。そして、脱兎の如く逃げ出した。

「待て、コーリー！ 今日と言う今日には……！」

「いやーん、怖い怖い。カナメちゃん助けて～」

またもや始まる追いかけっこに、カナメは、深い深いため息を吐いた。

反省会も、特別大きな反省がないまま終わり……まあもつとも、今日は大勝利だったので当然なんだろうが、ともあれ解散と相成つた。

そして今、夜の七時。

未だに俺は、オーリオウル・オンラインの中にいた。
まあ、何をしているのかと言つと。

要約すれば、花火たつた。

打ち上げられた花火が、ハラハラハラという効果音を伴って光の花を咲かせ、そしてもう一輪　　その隣でまた花が咲く。

おおおおおーっ、という歓声のもと、集められるだけ集

暇人、もといプレイヤーたちが、上空を見上げている。
上空には、田んぼの下、光の花びらの二葉一花。

上空で、また、夕べ瀧の田環の下、光の花かは」と咲いた。

花火アイテム、というものがある。

こいつは、製造職の中でも最も趣味の色が強い『火薬職人』クラスによるものだ。まあ本来は爆弾なのだが、特別なスキルとアイテムがあればこれこの通り、リアルとまったく変わらない大きな花火も作れるのだ。

今回の花火大会は、ギルドの倉庫に眠っていたものと、新たにいくつか買い込んだものを、まとめて打ちあげて花火大会にしよう、なんて話になつたのだ。

ちなみに発案者はミミさんで、全員を集めて回つたのは、なぜか
顔が広い俺と人当たりのいいライだ。そこに、夕方になつてログインしてきたギルドの面々も集まり、割と結構な人数で花火大会と相
成つた。

花火大会が催されたここは、小高い丘の「つえ」にある、一面の花畠だった。

周囲は見渡せる限りの絶景で、その中で打ちあげられる花火といふのも、現実の日本では絶対に味わえないだろう感慨深いものだ。まあ根本的に、今リアルの季節は冬なわけだが。

そしてまた、上空に大きな花火が一輪。

あの下では今頃、ミミさんが花火アイテムをバンバン使って打ちあげているはずだ。

製造職を一通り網羅しているらしいミミさんは、なんでも花火アイテムをより派手に打ちあげるスキルも持っているらしい。とはいさすがに申し訳なく、なんなら俺がやる、と買って出たのだが、曰く「これはこれで面白いし、一番近くで見れるから」とのことであんわりと断られてしまった。

相変わらず、あの人は職人の鑑だと思つ。

「……何を考えているんだい？」

気遣わしげな声に、ふと横を振り向くと、そこにはいつの間にかリンが座っていた。

その表情は、どこか優しい。

ふわり、と花が舞つて 不意に、わけもなくどきりとしてしまい、そっぽを向いた。

「ああ……いや。ミミさんは大変だらうなと」

「はは、確かに。でも実際、確かにあれはあれで楽しんでるんじやないかな？」

「そうなのか？」

問い合わせると、ああ、と頷いた。

「一応、ちょっと行ってみたんだがな。何人か職人クラスの人人が集まつていて……結構楽しそうだったよ、打ちあげるのも」

「そうか……」

そして、またひとつ打ちあげる音が鳴つて、空に光の花が咲いた。
それを一人でじつと見つめながら……不意に、リンが言った。

「その……だな。力ナメ……」

「ん？」

言われて振り向くと、なぜかリンは顔を真っ赤にして、地面をじつと見つめていた。

「その……なんだ。お前はああいうが、今回は本当に感謝してる。
と、特に、ジーグが死んだとき、お前ひとりで三十秒もタゲを持ち続けてくれたろう?」

「ああ、あれか」

言われて、少し苦笑する。

「ありや正直、シノブ姉の一弱体毒（ＷＰ）がないと速攻死んでた
けどね」

そう断言できるほど、あの時のシノブ姉の立ち回りは、完全に神懸かっていた。

「そつ、そうかもしれないが、私はあの時の、その、お前の貢献が
大きかつたと思うー。そ、そそそ、その、正直ちょっととかつ
かう?」

わけが分からず問い合わせると、いつの間にかリンの表情は茹であがつたタコの「じ」とく真っ赤に染まっていた。毎回思うに、VRMMOのこういう感情表現エモーションは少々ばかり大げさな気がする。

「ほん、とリンは仕切り直すように大きく咳払いして。

「その、なんだ。少し話があるんだが」

「あ、ギルドに入れつてのはパスな。いい加減ライを止めてくれよ

……リーダーさん」

機先を制する形で、若干うんざりしつつ言った。実のところ、俺達を執拗に と言つと表現が悪いが ギルドの勧誘してくるのは誰よりライなのだ。正直、一週間で十回ほど言われたことがあり、

その時は「勘弁してくれ」と思つたものだ。まあ……それでいて嫌味にならないのがあいつなんだが。

リンは「分かった」と少し頷いて……同時に、「いや」と首を横に振る。

「いや、 そう言ひ話じゃなくてだ…… カナメ」「ん？」

と 再び、 空に打ちあがる花火が音。

その音が大きかったので、 首をそちらに向けると ひたすら特大の花火が、 空に一輪の花を咲かせていた。周囲から、 再びの歓声が上がる。

「その…… カナメ。この後、 少し、 時間があるか……？」

周囲と同じように、 それをぼけ一つと見上げていたカナメの耳に、ふと囁いた声。

視線を返すと、 真っ赤に染まつた顔のまま、 彼女は真っすぐにこちらを見つめていた。しかし先ほどの声には、 どこか不安と、 緊張が混ざつたような色があつて 。

「いいんですか？ ユーリさん」

呼ばれて、 優しげな声に振り向くと、 そこには金髪碧眼の少年ライリッシュが立つていた。

言葉の割に、 少しも心配していそうな気がしない。まあもつとも、この少年の笑みが崩れたところなど、 戦闘中ぐらいしか見たことがないわけだが……。

「いいんですか、 つて何がよ」

ふん、 と胸を張る。

まあ、 問い返さなくても分かつてるけど、 と思いながら。

「カナメさんのことですよ…… 言わなくても分かるんじゃないです

か？」

「だから、カナメが、どうしたっていつのよ？」

正直、自分は、この少年が得意といつわけではなかつた。実のところ、こいつが一番の曲者なんぢやないかと思つ。いつそどこかのギルドのスパイでした、とか言われてもまったく驚かない。しかし何より厄介なのが……恐らく、コイツはそんな自覚なんてまったくなくて。きっと、心の底からギルドの一員として、自分たちを仲間だと思っているだらうこと。

そして、何より私がコイツを苦手としてるのは

「……だつて。リースさん、カナメさんのことが好きなんでしょう？」

いつも風に、人の心を勝手に読んでくるといふとか。

二人の視線の先では、リンとカナメが何やら話している。まあ声までは聞こえてこないが、リンが赤くなつたり青くなつたり慌てたりしているので、内容はお察しの通りだらう。

「……それこそ、良いも悪いもないでしょ」

再び、空に花火が打ちあがる。

それを見上げないまま、ほんの小さくため息を吐いて。

「リンは決めてたんでしょう。S級コニーク倒したら、気持ち伝えるつて」

こんないい雰囲気で、こんな綺麗な景色で……それに第一、リンが本当に心を決めたのなら。

私の出る幕なんて、本当にありはしない。

「大変ですね……大人つて」

少年が言うや否や、インベントリーを高速で操作。右手に杖を出現させ、それでぽかり　という効果音の割に割と強烈に　少年

の頭を殴打した。

もつとも、私なんかよりも数倍は硬いだらつ少年のHPは、1ドットほどしか削れなかつたが。

「今度言つたらぶつ放すわよ」

杖を突きつけて言つと、少年は「ははは」と小さく笑つた。

実際に、大人という奴は大変だ。

いろんなものに見切りをつけて、いろんなものを諦めていく。毎日をただ生きるだけで、その先に何があるのかもよく分からぬ。むしろいっそ、子供時代の方が、もつといいろんなものが見えてたんじやないだらうか。

大人になれば、立派になるのではなくて ただ擦り切れて、自分の放つていだらう光が鈍くなつていてだけなんだと気づいたときには、もう完全に手遅れだ。

まあとは言つても、私はそこまでオバサンじやない。まだギリギリで二十代前半だし。

確かにこの小柄なキャラクターには合つてないかもしぬないが……。

だけれど、この自分とは正反対のよつたキャラクターのお陰で、私はこの世界を愛せたんだろうと思う。この世界を愛せたから、リンクと出会えて、S・E・Lと出会えて、カナメと出会えて……こんなにも仲間に恵まれた。

それ以上、望むものが何があるだらうか？

私はもう、諦めるのには慣れてしまつた。だからせめて、若い彼らには、いろんなものを諦めて欲しくないのだ。

いつかリンの恋が、彼女自身を傷つけることがあつたとしても…… その時は私が癒してみせる。

それは大人だからじやない。友達だから。親友として……そして仲間として。

これ以上の得難いものを、私は知らない。だからそれ以上なんて望まない。

……だから、良いも悪いもあるわけがないのだ。

(……でも、もし生まれ変わることがあるなら)

それは、本当にどうしようもない、密かな……絶対に自分の胸の裡にしまっておくべきだらう、そんな想い。

もし生まれ変わることがあって。

そのとき、彼と私が、結構近い歳だつたりして。ばつたりと、学校が偶然一緒になつて。

(……馬鹿ね。少女か、私)

自分の、そんなひそやかな想いを……しかし、隣の少年は見透かしたよ!」

「僕は結構、ユーリさんって可愛いと思いますけどね」

まったくもつて、調子のいいおべんぢやらだ。

次、同じこと言つたら、絶対ぶつじばす。

そんな想いを胸に抱きながら……少女の顔をした自分は、小さく笑つた。

「だから、アンタは嫌いなのよ」

ただ、それを遠くから見詰めていた。私には、他に出来ることなんてなかつたから。

「カナメ……」

名前を呼ぶ。今その少年は、少女と楽しそうに話している。でもきっと、彼は気づいていない。隣に座る少女の気持ちに。

「カナメは……二ブチン、だから……」

だから、気づかない。

彼女の気持ちにも　そして、自分の想いにも。

蓮宮忍にとつて、千堂要是弟分だった。

お互に親が不在で、そしてたまたま家が隣で……気がつけばそういう構図で、いつの間にかそういう関係だった。本当の姉弟のように育ち、そして歩いてきた。

自分が苦しいときも、悲しいときも、嬉しいときも、ずっとそばにいてくれた。

自分が言いたいことも、すぐに分かってくれる。それだけ　それだけ理解してくれているのに。なのに、この気持ちには気づかない。

(なんでだろう?　もしかして……気づかないフリ?)

ううん、それはないだろう。彼は、そんなことが出来るほど器用じゃない。

だとしたら……うう。やっぱり、ただ鈍いだけ。

「カナメ……」

分かつていてる。

きっと、自分のこの気持は伝わらない。

彼は気づかず、そして私は、その一步を踏み出す勇気がない。

だから、この一步は永遠に埋まらない。

だけれど、きっと。リンは……あの子は、その一步を踏み越えるだろう。

その一步を彼女が踏み替えた時。自分たちはどうなる?　自分とカナメの関係は……何か変わってしまうのだろうか。

「……怖い」

怖い。それが怖い。ひたすらに怖い。

恋人でいてくれ、なんて言わない。ただ、自分の傍にいてくれる

だけでいい。ずっとずっと、自分の傍で、いつもみたいに笑ってくれれば、それでいい。

けれど そんな想いに、きっと彼は気づかない。

「そろそろ……卒業、なのかな」

彼から。そして、自分から。

互いに一人の人間として……彼に依存することなく、生きれるようにな。

思えば彼は、ずっとその手助けをしていてくれた気がする。

「ずっと……カナメに、甘えっぱなし」

彼も悪いんだ。甘やかされてしまうから、甘えてしまう他になくなる。そうに違いない。

だからきっと……彼女と付き合いだして、自分を甘やかせる余裕がなくなれば、自分はきっと自立できる。そうに違いない。

でも でも。

「もし……生まれ変わったら……」

もしもこの世界が終わって、自分が死んで、カナメもまたいつか死んで。

そして来世 生まれ変わることがあるのなら。

自分とカナメは、何か、今とは違う関係を築けるだろうか？

姉弟のような二人ではなくて……踏み出せないこの一步を、踏み出せる関係に変わることが……あるだろうか？

(……馬鹿な……妄想)

そう、それは妄想だ。ただの妄想。

転生なんてものはありえない。もしあつたとして、再び出逢えることがあるのなら、それは奇蹟だらう。

(私と、カナメが恋人とか……変)

ああまったく変だ。想像がつかない。そんな未来、まったくもつて想像がつかない。だから 。

(ずっと、想うだけなら……いいよね)

願わくば、奇蹟を。

しかし奇蹟なくとも……彼を想い続けるだけは。この胸の内側にある優しい想いを、ずっと抱えて生きていくだけは、出来るから。

「カナメ……」

どうか、幸せになつて。

これだけは、違ひなく 蓮宮忍にとつて、間違ひなく本物の願いだつた。

かくして、花火大会は続いていく。

いろんな人の、いろんな想いを乗せて……それを空に打ちあげるようにな。

八時三十分。

公園の「ランコ」に腰かけたまま、待ち人に片手を挙げた。

「よつ」

息が白く染まる 季節は冬。

あの後、「時間はあるか」と聞かれて了承した俺は、リアルの、リンの家の近くにある公園で待ち合わせすることとなつた。

まあその理由は単純で、俺はスクーターがあるが、彼女は徒歩で来るしかないからだ。

実際、それよりも十分ほど早く到着した俺は、ランコなどを漕ぎながら、彼女の到着を待ち そしてきつかり三十分。相変わらずの完璧さで、少女は姿を現した。

もつとも、俺たちはもともとリアルでの知り合い、というわけで

はない。

しかし、S・E・Lの中でも特に付き合いのあるメンツ リン、ユーリさん、ライ、ミミさんの四人とは、リアルで何度かオフ会を開いたこともある。

まあ最初は、ユーリさんのキャラアウーマン的な出で立ちにびっくりしたり、リンがゲームの中そのままの外見だったことに驚いたりと、大変だった。

ちなみ、そのままといったのは服装の話ではなく、顔の出で立ちの話である。

オーリオウル・オンラインにおいて、アバターの顔は自動的に決定される。

といつても無茶苦茶な顔になつたりすることはあまりない。なんでも、自分の深層意識を読み取つて、そこから生成されるらしい。生成はやり直せるが、そこまで大幅に変化することもない。

そしてそれゆえに、あのゲームの中で、一つとして同じ顔は存在しないし、性別を変えてプレイすることも不可能だ。まあ声は変化しないから、顔だけ変えてもすぐ分かるだろうが。

とはいえる……本人の顔がそのままアバターになつてしまふ例は、間違いなく希少だろう。むしろリン以外には見たことも聞いたこともない。

まあ本人はそれなりに気にいつていて、曰く「違和感がなくてやりやすい」らしい。

そしてライ曰く、「リーダーは根が正直すぎるから、それが出了んだと思いますよ」とのこと……実のところ、俺もこの説を推している。

まあ、ネットゲームの中でも話題になるほどの美人なので、当然、こちらで見てもその美しさはひとつとして損なわれていない。むしろ、リアルの方がどちらかと言えば魅力的に見える。

まあそれも当然だわ。

次世代VRMMOと謳われる オーリオウル・オンライン でさえ、表情の完全再現は果たせていない。リアルでは分かるシノブ姉の表情が、ゲーム内ではろくろく分からぬようだ。「いくらリアルとはいっても、やはりゲームなのだ。リアルの彼女を見ると、毎回そんな想いに捕われてしまう。

「とりあえず座れよ」

「あ、ああ……」

隣のブラン口を指し示され、どこかいつもより綺麗な気がするリンクが、静かに腰を下ろした。ギイ、とわずかな音を立てると同時に、口を開く。

「すまないな……。待たせたか？」

「いや、大して待つてないよ。思つたより車が少なくて早く着いただけさ」

「こちらの言葉に、「そつか……」とだけ答えて、その後には静寂が満ちる。

お互に無言のまま……俺は空の星空を見上げ、リンは地面をじつと見つめていた。まあ別にそのままでこれといって文句はないんだが、静寂がなんとなく痛々しかつたので、口を開く。

「……で、どうしたんだ？ 急に、時間あるかつて

「あ、ああ……」

「ギルド……じゃないって言つたか。じゃああれかな。次の狩りの話？ 誘つてくれるなら行くけど、回復アイテムがあんまり心許ないから……」

「いっ、いや……っ！ 違う。その……違うんだ」

思いつく話をつらつらと重ねていくと、ぱっとリンが顔を上げて否定した。

「じゃあ何の話なんだろう……分からず首を傾げる俺に、リンは、

ずつはあと何度も深呼吸を経て、もう一度俺に振り向いた。

暗がりでよく分からぬが、なぜか、ここはゲームの中でもないのに、その顔が赤く染まっている気がする。

「その……ずっと決めてたんだ。S級のコニークを倒したら……つて」

「？」

途切れ途切れの言葉と共に、リンが立ちあがる。

俺もそれを追うように、ブランコから立ちあがつて……そして、振り向いたリンと、真正面から視線が合つた。

「……私は。私は、ずっと……」

そして、それはあまりにも唐突だつた。

世界が白く染まっていく。

白夢、ではない。ただ世界が遠ざかって

遠ざかっていく。

「私は、ずっと……君のことが」

「

その中で、ただリンの声だけが聞こえて。
そして、それすらも遠ざかって……。

「君のことが……」

「

その言葉の終わりを聞けないままに。

世界は……ただ白く。

ただ白く　塗りつぶされていった。

(03) - 花火(後書き)

……そして、ついに本編へ。

ちょっとプロローグが長くなってしましました。

暇な時に更新するので不定期ですが、またまた暇な時に読んでもらえればと思います。

バレット・ブルーよりは更新が早い……かな?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3702y/>

悠久のフルトゥーナ

2011年11月9日19時11分発行